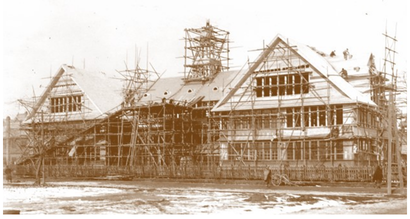
藤女子大学カトリックセンター

ニュースレター ぶどうの木

100th Co-Creating the Future of Fuji 1925-2025

第21号　　2023年9月



創立記念日 9月28日

「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。
人がわたしにつながっており、
わたしもその人につながっていれば、
その人は豊かに実を結ぶ。」
（ヨハネ福音書15章5節）

グテーレス国連事務総長が、今年の世界的な猛暑について、「地球沸騰時代の到来」という衝撃的な呼び方をしました。この言い方がオーバーであると批判する人もいるかもしれませんが、私たちの実際の体感反応は、「まさにその通り」と叫びたくなるほどでした。

長かった夏が終わり、後期がはじまりました。2年生以上の学生にとっては、入学以来初めて満足な大学生活らしきものを体験している今年です。1年生は入学以来、大学生活の面白さと苦労を味わいながら、自分の精神的な成長を感じつつ日々を送っていることでしょう。

後期始まってすぐ、藤学園の創立記念日を迎えます。1924年9月28日に、最初の校舎の上棟式が行われました。この日は創立者ヴェンセスラウス・キノルド司教の保護の聖人聖ヴェンセスラウスの祝日で、上棟式のこの日を創立記念日と定めました。

1920年8月にドイツから札幌に到来した3人の修道女たち。隙間風の吹き込む貧しい小さな家に住み、西洋人にとってトンデモナイほど難しい日本語の学習に励みながら、託された学校開設の使命を果たすために必要な準備を始めました。

しかし、彼女たちの夢をぶち壊すような大きな障害が目の前に立ちはだかりました。第一次世界大戦後、敗戦国ドイツに課された莫大な賠償金の支払いのために、ドイツ政府はマルク紙幣の増刷に増刷を重ね、ハイパーインフレ―ションとなったのです。特に1923年当初からは急激に悪化し、マルクの価値が全くなくなり、ドイツからある程度用意してきた学校開設のための資金も、何の役にも立たなくなりました。それだけではなく、日常の生活にも困窮する事態となり、ドイツの本部からは学校開設の使命を断念して、帰国するよう指示が来ました。

しかし、キノルド司教はかつて北海道で宣教活動をして健康上の理由でドイツに帰っていたドロテオ神父を、アメリカに寄付金集めのために派遣してくれるよう、ドイツのフランシスコ会に願いました。この願いが聞き入れられて、ドロテオ神父はアメリカで2年間寄付集めの使命を果たしました。その間、札幌にいるシスターたちは、アメリカから送られてきた1万件ほどの住所宛に、寄附の依頼の手紙を送りました。

お陰で資金の目処が立ち、1924年9月に学校開設認可申請書を文部省に提出し、また校舎建築も始めました。12月24日には設置認可が届き、シスターたちはこのクリスマスプレゼントに歓喜しました。

もし、絶望的な状況の中で、キノルド司教もシスターたちも学校開設を諦めてしまっていたら、私たちの学校は存在しなかったのです。

学校開設には更に試練があり、校長予定者のシスター・ヨハンナ・サロモンが開校直前の1925年3月に入院となり、4月8日の入学式にも不在で、代理のシスター・クサヴェラ・レーメが新入生を受け入れました。校長は5月27日に僅か37年の若い生涯を神様にお返しし、待ちに待った生徒たちの顔を見る喜びも犠牲として捧げ、この始まったばかりの学校の将来を神様に委ねました。

学校開設に当たって、このような思いがけない試練に直面したキノルド司教とシスターたちでしたが、神の導きへの信頼を失うことはありませんでした。

開校後も昭和の始めから次第に軍国主義の色が濃くなり、戦争突入、戦時下のキリスト教弾圧、等々、次から次へと困難なことが続きました。しかし、このような中でも創立者キノルド司教は沈着で賢明な判断でシスターたちを導き、学校を守りました。

このように始まった私たちの学園は、その後も様々な試練に遭いながらも、一つ一つ乗り越えて今に至っています。

聖書のことば

「悪い実を結ぶ良い木はなく、また、良い実を結ぶ悪い木はない。 木は、それぞれ、その結ぶ実によって分かる。

（ルカ　6:43-44）

被造物の季節
～9月1日-10月4日～

教皇フランシスコは、昨年、毎年9月1日から10月4日までを特に「被造物の季節」とすることを定められました。10月4日は12～3世紀のイタリア・アシジに生きた、単純・素朴な、愛深い聖フランシスコの祝日です。すべての被造物を神における「兄弟姉妹」として大切にし、それゆえに、彼は、現代において「環境保護の聖人」という称号をいただいています。本学の北16条キャンパスの中庭に、彼のブロンズ像が立っています。
以下、今年のこの「被造物の季節」にあたって、教皇フランシスコが発したメッセージから抜粋します。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

今年の被造物の季節には、自分の鼓動、母や祖母の鼓動、被造物の鼓動、神の鼓動、そうした鼓動に耳を傾けてください。今日、こうした鼓動はばらばらで、正義と平和のうちに調和していません。この大河から水をくめずにいる人が、あまりにも多すぎます。ですからわたしたちは、環境不正義と気候不正義の犠牲者の側に立ちなさいとの声に、被造物に対するこの愚かな戦いを終わらせなさいとの声に、耳を傾けなければなりません。
この戦いの影響は、干上がった多くの河川に表れています。人々の利己心にあおられた貪欲な消費主義が、地球の水循環を狂わせています。化石燃料の無節操な消費と森林伐採は、温暖化と深刻な干ばつを引き起こしています。地方の小さな集落から大都市に至るまで、悲惨な水不足が家庭に深刻な影響を与えています。さらには、強奪的な企業は、石油やガス採掘のための水圧破砕法（フラッキング）、見境のない巨大採掘事業、集約畜産といった過激な手法で、わたしたちの飲料用水源を枯らし、汚染しています。聖フランシスコがいうところの「姉妹である水」は略奪され、「市場の法則に従う一商品」へと変えられています。
国連の気候変動に関する政府間パネル（IPCC）は、直ちに気候変動対策を講じれば、より持続可能で公正な世界を築く機を逸することはないと認めています。わたしたちは、最悪の事態を未然に防ぐことができるのであって、そうしなければなりません。「本当に、多くのことができるのです」（同180）。無数の細流や渓流のように、わたしたちもいずれは合流して一つの大河に流れ込み、この驚くべき地球のいのちと人類家族のいのちを、これから先何世代にもわたって潤せるのか――。手を取り合って、正義と平和の流れが地球全体を巡るよう、果敢に歩んでいきましょう。
まずは、わたしたちの心を変えることで、この大河に貢献しましょう。なんであれ変革を始めるなら、心を変えることは不可欠です。それは、聖ヨハネ・パウロ二世がわたしたちに促した「エコロジカルな回心」です。被造物とわたしたちとの関係の刷新であり、被造物を利用し尽くす対象とみなすのをやめ、むしろ、創造主からの神聖な贈り物として保護するものとするのです。さらには、環境保全の実践への総合的なアプローチには、四つの方法が求められることを理解してください。それは、神に向かうもの、現在と未来の兄弟姉妹に向かうもの、すべての自然に向かうもの、そして自分自身に向かうものです。
次は、わたしたちのライフスタイルを変えることで、創造主と被造物を感謝のうちに賛美することから始め、「エコロジカルな罪」を悔い改めましょう。この過ちは、自然界を、さらにはわたしたちの兄弟姉妹をも傷つけるものです。神の恵みの助けをもって、廃棄物を減らし、不必要な消費を減らすライフスタイルを取り入れましょう。
最後に、大河の流れを維持するには、社会の舵を取り、今日と将来世代の若者の人生を左右する公共政策の変革が必要です。一握りの人には法外な富をもたらし、大多数には劣悪な状況を強いる経済政策は、平和と正義の終焉を決定づけます。富裕国が「エコロジカルな債務」を積み上げてきていることは明らかです。世界の指導者たちは、科学に耳を傾け、化石燃料の時代を終わらせるための迅速かつ公正な移行を開始しなければなりません。地球温暖化のリスクを抑制するという「パリ協定」での取り決めに照らせば、継続的な化石燃料の探査とインフラ拡張を許容することなどあってはならないことです。気候変動の影響のいちばんの被害者となる、貧しい人や次世代の子らに対するこの不正義を止めるために声を上げましょう。わたしは善意あるすべての人に向けて、社会と自然について、このような姿勢で行動するよう呼びかけたいと思います。

教皇フランシスコの
X(Twitter)より

Pope Francis_@Pontifex

Let us pray together in the face of the many challenges and difficulties of our age. We should not remain idle spectators. Rather, may we actively engage for a more just and peaceful world.

ミ　サ　の　お　誘　い

北16条キャンパスの聖マリア聖堂では、ほぼ毎月一回、学長マルクス神父様によって、ミサを捧げていただきます。
どなたでもご自由にご参加ください。
次回　　10月10日（火）　12:20-12:50